

重点取組分野	令和 元 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①少人数指導、TT指導などを通して、効果的に学力向上を図る。 ②校内研究授業や日々を通じて積極的に授業公開し、生徒が主体的に取り組む授業をめざす。 ③放課後の学習会を実施し、基礎の定着を図る。形態を工夫し、生徒の自ら学ぶ意欲喚起に努める。	①少人数、TT指導などを通してわかりやすい授業づくりに努めた。 ②授業改善をめざした研究授業、カリマネに関連した研修を行い、実践に生かせるようにした。 ③定期的に実施し、対象生徒を明確にしながら生徒の基礎学力の向上につながるよう努め	B
豊かな心	①コミュニケーション能力育成の取組として、生徒会と連携をして「朝のあいさつ運動」の充実を図っていく。 ②横浜子どもの会議の内容を受け、全校生徒に報告提案を行う。 ③道徳、人権教育の情報交換を小学校、地域、保護者等と行い、9年間通して、自己の生き方、人間としての生き方の考えを深めていく。	①生徒会と連携し、各学年の学級委員、企画委員会を中心として、毎日「朝のあいさつ運動」を行うことができた。 ②子ども会議を行ったが、休校のため全校生徒への報告提案はできていない。 ③小学校、中学校での授業見学を通して、道徳、人権教育について考えを深めることができた。	B
健やかな体	①保健体育科では「健康の保持増進」を第一の目標とし、基礎体力の向上に努めるとともに、体を動かす楽しさや喜びを学ぶことで、生涯にわたって健康を意識し、運動を楽しむ生活を送れるようにしていく。 ②家庭科では、食教育と関連して保健体育・保健分野と連動した授業(特に食生活)を展開する。	①保健体育科ではウォーミングアップを工夫し、導入を意識して楽しく活動できるようにした。また、保健分野では他教科との関連を意識して取り組み、知識を深められるようにした。 ②家庭科では、食育との関連と、保健体育・保健分野との連動した食生活の充実を図る取り組みができた。	B
生徒指導	①朝のあいさつ運動により、お互いに声を掛け合える関係をつくる。教育相談期間や日々の生活の中で、生徒とコミュニケーションをとる時間を大切にしながら信頼関係を育んでいく。 ②横浜子ども会議で話し合ったことをもとに学校生活を見つめなおし、課題があれば解決に向けて取り組んでいけるよう支援する。	①朝のあいさつ運動や、下校指導の時間を大切に、生徒とコミュニケーションを深めるように努めた。 ②生活の決まりをしっかりと守れる生徒を育てていく。 ③自分を振り返り、これからの生活に生かせるように支援する。 ④将来に向けて、自律した生徒を育てていく。	B
保健安全管理	①安全点検により、問題点の早期発見と適切な処置にあたる。また、清掃活動強化週間(クリーン共進)等の清掃活動を充実させていくことで、安全・清潔な教育環境づくりを促す。 ②朝の健康観察、確認連絡を確実にし、不登校の前兆、感染症の発生等に対し早期に対応できるようにする。	①安全点検が細部にわたり行われ、各部署と連携しながら計画的に修理、修繕され整備の充実が見られた。クリーン共進を継続的に実施し、清掃活動の充実を継続させていく。 ②生徒の健康管理について連絡を取り合いながら対応がなされた。	B
保護者、地域との連携	①評価説明会や年4回の懇談会、地域懇談会で学校経営方針について説明を行う。 ②学校便りを毎月発行し、さらに学校ホームページに掲載して、教育活動の報告など積極的な情報発信に努める。また、メール配信による緊急時等の連絡を行うようにする。	①については本年度より学校教育目標を変更し、学校経営方針について説明することができた。 ②については学校便りを毎月発行し、効果的に情報を発信することができた。また、学校ホームページによる積極的な情報発信に努め、メール配信による連絡を十分行った。	B
特別支援教育	①生徒の持つ困り感について、情報をもとに適切な支援を行う。可能な支援を展開する。 ②通級指導教室の専門的支援センター機能を特性から行動を理解する際に有効活用し、「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の作成と実際の支援が生徒のニーズに適しているか評価する。	①月1回ケース会議を行うことが難しかったため、SCが勤務日に情報交換や報告を個々に話をもつことを心がけた。 ②校内研修を2回も、特別支援教育全般の知識を学び、今年度の「個別的教育支援計画」作成の実践を行った。	B
通級指導(センター機能)	①支援を必要とする生徒が、本来の力を発揮できるようにするために通級による指導を行います。それぞれの課題や状態に応じて生徒自身が社会及び環境に主体的に参加し、自立していくための支援を行います。 ②在籍校と連携を取り、実態把握や手立ての提示、支援計画作成への協力をします。	①については、在籍校や家庭、外部機関と連携を取りながら、生徒一人ひとりの課題や強みを把握するように努め、生徒自身が社会及び環境に主体的に参加し、自立していくための支援をした。 ②については、在籍校のニーズを確認し、校内の特別支援体制が充実するように連携に努めた。	B
いじめへの対応	①いじめの起きない生活環境作りをするとともに、常に生徒の実態把握に努める。 ②月1回以上いじめ防止対策委員会を開催し、認知された案件の経過確認をいねいに行うことで再発防止に努める。	①いじめの早期発見、事案対処のため、いじめの疑いに関する情報や生徒の問題行動に係る情報の収集と記録を共有した。 ②いじめを受けた生徒に対する支援、いじめを行った生徒に対する指導の体制、対応方針の決定と保護者との連携といった対応を組織的に実施した。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①教科指導・人権指導・生徒指導や保護者との連携等の研修会を年4回実施する。 ②5年次までの教員が年間数回の授業見学と研究授業を計画的に実施する。また、5年次までの教員が集まって講習会を開けるように計画する。 ③働き方改革の視点から、教職員が快適に作業できる環境を作るための議論を進めていく。	①教科指導・人権指導・生徒指導や保護者との連携等の研修会を年4回実施できた。 ②5年次までの教員が授業見学と研究授業を実施した。また、5年次までの教員が集まって講習会も開催することができた。 ③定時退勤日の活用が定着していった。また、各会議についての回数を減らす議論を行った。	B
ブロック内評価後の気付き	教科毎に研究授業参観を行い、授業に関する協議及び人権的な観点での指導の意見交換を行った。授業では主体的な活動やICTが活用され、リーダーを中心に活発な話し合いが行われていた。今後は新教育課程に合わせた小中の連携やつながりを意識した教育活動を研究していく必要がある。また、国際的な視点からは、図や写真を使用し、視覚的にわかりやすい授業を行うことや、授業への通訳入り込みの増加の必要があるとの意見があった。	今年度は新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、毎年行っていたような交流が実施できなかったが、次年度に向けては、相互の授業見学や新教育課程に合わせた授業研究会の実施など、小中の連携を意識した交流や研究会の開催を予定している。	B
学校関係者評価	・学校全体は落ち着いた雰囲気生活している。 ・学校生活や部活動など、楽しんで過ごしているようなので安心している。 ・小中の連携や交流が充実しているが、学力向上に向けて一層の協力が望まれる。 ・中学生が地域行事等への参加が少なく、中学生の地域行事の参加をお願いしたい。 ・校まつり、南まつり、光のふるむなど等小中学生ともに喜んで参加する行事も多いが、防災の観点からも地域行事に中学生に力が欲しい。	今年度は新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、生徒が地域と関わる機会がほとんど奪われてしまった。コロナ収束後は、地域行事への参加等を通して、生徒が再び地域とのつながりをとり戻していく予定である。	B
中期取組目標振り返り	・新しい学校教育目標の下、学校経営中期取組目標において、9つの重点取組分野の目標の実現に向けて、全職員で取り組んできた。担当部署が明確になってきて、職員の参画意識の向上につながっている。 ・生徒の地域活動への積極的な参加については、学校と地域が連携して取り組んでいく必要があると考える。「まち」とともに歩む学校懇談会を中心としながら、取り組んでいきたい。 ・新教育課程の検討を通じて、個々の教育活動の意義や方法について検討してきた。より充実した教育への取組を続けていきたい。	○新学習指導要領における育むべき資質・能力を明確にした。今後は教職員の学力観、指導観の転換を図る必要がある。 ○次年度の新学習指導要領の完全実施に向けて、教育課程委員会を中心として、評価の在り方、評価方法、資料を含めた評価計画の作成を行うとともに、生徒への周知も行ったが、次年度以降も丁寧な説明が必要がある。 ○今年度はコロナ禍により地域との連携が不十分であったため、次年度以降、感染症の状況による部分は多いが地域の教育力を活かしながら教育活動が展開できるよう努める。 ○計画的な教育相談の実施を通して、家庭との密な連携を図ることを心がけてきた。次年度は今年度実施できなかった家庭訪問を加え、生徒の生活環境などより細かく保護者との連携に努める。	B

重点取組分野	令和 2 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①少人数指導、TT指導などを通して、効果的に学力向上を図る。 ②校内研究授業や日々を通じて積極的に授業公開し、生徒が主体的に取り組む授業をめざす。 ③放課後の学習会を実施し、基礎の定着を図る。形態を工夫し、生徒の自ら学ぶ意欲喚起に努める。	①少人数、TT指導などを通して細やかに指導できる体制づくりに努めた。 ②新しい評価の観点で研究授業、研究討議を予定していたが、感染症拡大を受け中止となった。 ③基礎学力向上、学ぶ意欲喚起をめざし形態や内容を工夫した。多くの生徒が参加し、意欲的に学んでいた。	B
豊かな心	①コミュニケーション能力育成の取組として、生徒会と連携をして「朝のあいさつ運動」の充実を図っていく。 ②横浜子どもの会議の内容を受け、全校生徒に報告提案を行う。 ③道徳、人権教育の情報交換を小学校、地域、保護者等と行い、9年間通して、自己の生き方、人間としての生き方の考えを深めていく。	①生徒会と連携し、各学年の学級委員、企画委員会を中心として、毎日「朝のあいさつ運動」を行うことができた。 ②新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、横浜子ども会議が実施できなかった。 ③情報交換の機会は少なかったが、学校内での情報交換や連携をすることができた。	B
健やかな体	①保健体育科では「健康の保持増進」を第一の目標とし、基礎体力の向上に努めるとともに、体を動かす楽しさや喜びを学ぶことで、生涯にわたって健康を意識し、運動を楽しむ生活を送れるようにしていく。 ②家庭科では、食育と関連して保健体育・保健分野と連動した授業(特に食生活(朝食の大切さ等))を展開する。	①保健体育科では、各種目合わせた基本ドリルを授業の導入に取り入れることで、体力向上と技能向上に努めた。また、学習カードを用いた自らの課題を明らかにし、その課題解決学習をさせ、できる喜びを味わうようにした。 ②食指導を中心に家庭科や保健体育をはじめとして学校保健員会等においても食について考える機会を設けた。	B
生徒指導	①教育相談期間や日々の生活の中で、生徒とコミュニケーションをとる時間を大切にしながら信頼関係を育んでいく。 ②横浜子ども会議で話し合ったことをもとに学校生活を見つめなおし、課題があれば解決に向けて取り組んでいけるよう支援する。	①教育相談期間だけでなく、朝のあいさつ運動や下校指導、休み時間などにも生徒とコミュニケーションをとり、生徒理解に努めた。 ②なぜ決まりを守らなければならないのかを生徒と共に考えることに力を入れた。 ③自分を振り返った結果をこれからの生活に生かしていくように支援ができた。	B
保健安全管理	①安全点検により、問題点の早期発見と適切な処置にあたる。また、清掃活動強化週間(クリーン共進)等の清掃活動を充実させていくことで、安全・清潔な教育環境づくりを促す。 ②朝の健康観察、確認連絡を確実にし、不登校の前兆、感染症の発生等に対し早期に対応できるようにする。	①安全点検が細部にわたり行われ、各部署と連携しながら計画的に修理、修繕され整備の充実が見られた。 ②生徒の健康管理について連絡を取り合いながら対応がなされた。	B
保護者、地域との連携	①評価説明会や年4回の懇談会、地域懇談会で学校経営方針について説明を行う。 ②学校便りを毎月発行し、さらに学校ホームページに掲載して、教育活動の報告など積極的な情報発信に努める。また、メール配信による緊急時等の連絡を行うようにする。	①については、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、懇談会を実施することができなかった。 ②については学校便りを毎月発行し、効果的に情報を発信することができた。また、休校期間中は、学校ホームページによる積極的な情報発信に努めつつ、メール配信による連絡も家庭に十分行った。	B
特別支援教育	①生徒の持つ困り感について、情報をもとに適切な支援を行う。可能な支援を展開する。 ②通級指導教室の専門的支援センター機能を特性から行動を理解する際に有効活用し、「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の作成と実際の支援が生徒のニーズに適しているか評価する。	①SC、SSW、区役所と連携し個別のケース会議を設け、持続可能な支援を展開した。 ②LGBTIに関する校内研修を開き、今後予想される対応について職員で理解を深めた。	B
通級指導(センター機能)	①支援を必要とする生徒が、本来の力を発揮できるようにするために通級による指導を行います。それぞれの課題や状態に応じて生徒自身が社会及び環境に主体的に参加し、自立していくための支援を行います。 ②在籍校と連携を取り、実態把握や手立ての提示、支援計画作成への協力をします。	①在籍校や家庭、外部機関と連携を取りながら、生徒一人ひとりの課題や強みを把握するように努め、生徒自身が社会及び環境に主体的に参加し、自立していくための支援をした。 ②在籍校のニーズを確認し、校内の特別支援体制の充実が確認できた。 ③具体的な体制が確立できていないの次年度以降の課題である。	B
いじめへの対応	①いじめの起きない生活環境作りをするとともに、常に生徒の実態把握に努める。 ②月1回以上いじめ防止対策委員会を開催し、認知された案件の経過確認をいねいに行うことで再発防止に努める。	①学校行事や道徳、普段の授業の中で、自分を大切にするとともに他人も大切であることを生徒に伝えていくように努めた。 ②いじめを受けた生徒に対する支援、いじめを行った生徒に対する指導の体制、対応方針の決定と保護者との連携といった対応を組織的に実施した。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①教科指導・人権指導・生徒指導や保護者との連携等の研修会を年4回実施する。 ②5年次までの教員が年間数回の授業見学と研究授業を計画的に実施する。また、5年次までの教員が集まって講習会を開けるように計画する。 ③働き方改革の視点から、教職員が快適に作業できる環境を作るための議論を進めていく。	①教科指導・人権指導・生徒指導や保護者との連携等の研修会をそれぞれ一回実施できた。 ②研究授業と講習会については、新型コロナウイルスの感染防止を意識したことで、例年のような実施には至らなかった。 ③2か月の臨時休校を受け、定時退勤日の活用ははやや後退したが、会議の回数を減らす試みは実現できた。	B
ブロック内評価後の気付き	教科毎に研究授業参観を行い、授業に関する協議及び人権的な観点での指導の意見交換を行った。授業では主体的な活動やICTが活用され、リーダーを中心に活発な話し合いが行われていた。今後は新教育課程に合わせた小中の連携やつながりを意識した教育活動を研究していく必要がある。また、国際的な視点からは、図や写真を使用し、視覚的にわかりやすい授業を行うことや、授業への通訳入り込みの増加の必要があるとの意見があった。	今年度も、昨年同様、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、当初予定していた児童生徒の交流活動とともに、授業研究や授業見学など教職員の交流活動も実施に至らなかった。新型コロナウイルスの感染が始まって以降、校種をまたいでの交流を行うことが困難な状況が続いているが、次年度以降も、年度当初にしっかりと予定を計画し、可能な限り推進していきたい。	B
学校関係者評価	・学校全体は落ち着いた雰囲気生活している。 ・学校生活や部活動など、楽しんで過ごしているようなので安心している。 ・小中の連携や交流が充実しているが、学力向上に向けて一層の協力が望まれる。 ・中学生が地域行事等への参加が少なく、中学生の地域行事の参加をお願いしたい。 ・校まつり、南まつり、光のふるむなど等小中学生ともに喜んで参加する行事も多いが、防災の観点からも地域行事に中学生に力が欲しい。	今年度は新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、生徒が地域と関わる機会がほとんど奪われてしまった。コロナ収束後は、地域行事への参加等を通して、生徒が再び地域とのつながりをとり戻していく予定である。	B
中期取組目標振り返り	・新しい学校教育目標の下、学校経営中期取組目標において、9つの重点取組分野の目標の実現に向けて、全職員で取り組んできた。担当部署が明確になってきて、職員の参画意識の向上につながっている。 ・生徒の地域活動への積極的な参加については、学校と地域が連携して取り組んでいく必要があると考える。「まち」とともに歩む学校懇談会を中心としながら、取り組んでいきたい。 ・新教育課程の検討を通じて、個々の教育活動の意義や方法について検討してきた。より充実した教育への取組を続けていきたい。	○新学習指導要領における育むべき資質・能力を明確にした。今後は教職員の学力観、指導観の転換を図る必要がある。 ○次年度の新学習指導要領の完全実施に向けて、教育課程委員会を中心として、評価の在り方、評価方法、資料を含めた評価計画の作成を行うとともに、生徒への周知も行ったが、次年度以降も丁寧な説明が必要がある。 ○今年度はコロナ禍により地域との連携が不十分であったため、次年度以降、感染症の状況による部分は多いが地域の教育力を活かしながら教育活動が展開できるよう努める。 ○計画的な教育相談の実施を通して、家庭との密な連携を図ることを心がけてきた。次年度は今年度実施できなかった家庭訪問を加え、生徒の生活環境などより細かく保護者との連携に努める。	B

重点取組分野	令和 3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
確かな学力	①少人数指導、TT指導などを通して、効果的に学力向上を図る。 ②新学習指導要領を受けて指導方法や指導体制の工夫につながるよう、校内研究授業など積極的に授業公開し、生徒が主体的に取り組む授業をめざす。 ③放課後の学習会を実施し、基礎の定着を図る。形態を工夫し、生徒の自ら学ぶ意欲喚起に努める。	①少人数、TT指導などを通して細やかに指導できる体制づくりに努めた。 ②新しい評価の観点で研究授業、研究討議を行うことで、具体的な実践につなげられた。 ③多くの生徒が放課後学習会や夏学習会に参加し、基礎学力向上をめざして取り組んだ。	B
豊かな心	①コミュニケーション能力育成の取組として、生徒会と連携をして「朝のあいさつ運動」の充実を図っていく。 ②多文化理解、多文化共生という視点も入れながら道徳人権教育を行っていく。 ③道徳、人権教育の情報交換を小学校、地域、保護者等と行い、9年間通して、自己の生き方、人間としての生き方の考えを深めていく。	①生徒会と連携し、各学年の学級委員、企画委員会を中心として、毎日「朝のあいさつ運動」を行うことができた。 ②LGBT研修等を通して、多様性という視点からも道徳人権教育を行った。 ③情報交換の機会は少なかったが、学校内での情報交換や連携をすることができた。	B
健やかな体	①保健体育科では「健康の保持増進」を第一の目標とし、基礎体力の向上に努めるとともに、体を動かす楽しさや喜びを学ぶことで、生涯にわたって健康を意識し、運動を楽しむ生活を送れるようにしていく。 ②家庭科では、食育と関連して保健体育・保健分野と連動した授業(特に食生活)を展開する。	①保健体育科では、各種目合わせた基本ドリルを授業の導入に取り入れることで、体力向上と技能向上に努めた。また、ICT機器を活用することで、より運動に興味を持ち、取り組む意欲の向上に役立った。 ②家庭科では、保健体育・保健分野と連動した授業(特に食生活)を展開する。	B
生徒指導	①朝のあいさつ運動により、お互いに声を掛け合える関係をつくる。教育相談期間や日々の生活の中で、生徒とコミュニケーションをとる時間を大切にしながら信頼関係を育んでいく。 ②横浜子ども会議で話し合ったことをもとに学校生活を見つめなおし、課題があれば解決に向けて取り組んでいけるよう支援する。	①日常的な生徒との対話を大切にし、生徒一人ひとりに寄り添った指導を組織的に取り組むことができた。 ②③場に応じた適切な判断力を育てるために、規則や規範の意義や望ましい生き方について考えさせるとともに、自己の行為を振り返り、次に生かせるように指導・支援することができた。	B
保健安全管理	①安全点検により、問題点の早期発見と適切な処置にあたる。また、清掃活動強化週間(クリーン共進)等の清掃活動を充実させていくことで、安全・清潔な教育環境づくりを促す。 ②朝の健康観察、確認連絡を確実にし、不登校の前兆、感染症の発生等に対し早期に対応できるようにする。	①定期的な安全点検により、経年劣化した箇所や修繕が必要な箇所を各部署と連携しながら、整備を行うことができた。また、清掃活動強化週間での清掃に対する意識を高めた。 ②毎朝の健康観察により、生徒とのコミュニケーションを増やすことができ、気持ちや体調の変化を早期に発見し、対応した。	B
保護者、地域との連携	①評価説明会や年4回の懇談会、地域懇談会で学校経営方針について説明を行う。 ②学校便りを毎月発行し、さらに学校ホームページに掲載して、教育活動の報告など積極的な情報発信に努める。また、メール配信による緊急時等の連絡を行うようにする。	①新型コロナウイルスの流行のため、大幅に制限を受けることとなったが、評価説明会は視聴形式で実施することができた。 ②学校での活動の様子を写真付きでHP上に頻りに紹介したり、臨時休校の際には、家庭への連絡をメール配信によって継続的に行うなど、緊急時の対応を行った。	B
特別支援教育	①生徒の持つ困り感について、情報をもとに適切な支援を行う。可能な支援を展開する。 ②通級指導教室の専門的支援センター機能を特性から行動を理解する際に有効活用し、「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」の作成と実際の支援が生徒のニーズに適しているか評価する。	①SC、SSW、区役所、児童相談所と連携し個別のケース会議を設け、持続可能な支援を展開した。また、地域との連携を図り、学校地域で子どもの支援を行った。 ②LGBT研修や多様な視点の道徳を行うことで、他者理解、共生の価値観を深め、子どもたちに学校をよりよくするためにできることを考える機会を作った。	B
通級指導(センター機能)	①支援を必要とする生徒が、本来の力を発揮できるようにするために通級による指導を行います。それぞれの課題や状態に応じて生徒自身が社会及び環境に主体的に参加し、自立していくための支援を行います。 ②在籍校と連携を取り、実態把握や手立ての提示、支援計画作成への協力をします。	①支援を必要とする生徒が、本来の力を発揮できるようにするために通級による指導を行います。 ②在籍校からの依頼を受け、特性の理解や手立て等、具体的な支援策について提示した。	B
いじめへの対応	①いじめの起きない生活環境作りをするとともに、常に生徒の実態把握に努める。 ②月1回以上いじめ防止対策委員会を開催し、認知された案件の経過確認をいねいに行うことで再発防止に努める。	①学校行事や道徳、普段の授業の中で、偏りのないものを見ることができるよう指導に努めた。 また、生徒からの相談などを学校・学年で共有し、いじめ防止基本方針から再発防止の確認や共通理解を図る。月1回以上いじめ防止対策委員会を開催し、認知された案件の経過確認をいねいに行うことで再発に努める。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①教科指導・人権指導・生徒指導や保護者との連携等の研修会を年4回実施する。 ②5年次までの教員が年間数回の授業見学と研究授業を計画的に実施する。また、5年次までの教員が集まって講習会を開けるように計画する。 ③働き方改革の視点から、教職員が快適に作業できる環境を作るための議論を進めていく。	①新学習指導要領が目指す新しい学力観に基づく教科指導や評価の在り方について、全体研修のみならず、各教科で日常的に検討を行った。 ②メンター研修を計画し、決めたテーマに沿って、継続的に授業見学を行った。 ③コロナ禍の中で、計画や予定、実施方法の変更を余儀なくされる場面が多く発生し、教職員の負担は増える状況にある。	B
ブロック内評価後の気付き	教科毎に研究授業参観を行い、授業に関する協議及び人権的な観点での指導の意見交換を行った。授業では主体的な活動やICTが活用され、リーダーを中心に活発な話し合いが行われていた。今後は新教育課程に合わせた小中の連携やつながりを意識した教育活動を研究していく必要がある。また、国際的な視点からは、図や写真を使用し、視覚的にわかりやすい授業を行うことや、授業への通訳入り込みの増加の必要があるとの意見があった。	今年度も、昨年同様、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、当初予定していた児童生徒の交流活動とともに、授業研究や授業見学など教職員の交流活動も実施に至らなかった。新型コロナウイルスの感染が始まって以降、校種をまたいでの交流を行うことが困難な状況が続いているが、次年度以降も、年度当初にしっかりと予定を計画し、可能な限り推進していきたい。	B
学校関係者評価	・学校全体は落ち着いた雰囲気生活している。 ・学校生活や部活動など、楽しんで過ごしているようなので安心している。 ・小中の連携や交流が充実しているが、学力向上に向けて一層の協力が望まれる。 ・中学生が地域行事等への参加が少なく、中学生の地域行事の参加をお願いしたい。 ・校まつり、南まつり、光のふるむなど等小中学生ともに喜んで参加する行事も多いが、防災の観点からも地域行事に中学生に力が欲しい。	今年度は新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、生徒が地域と関わる機会がほとんど奪われてしまった。コロナ収束後は、地域行事への参加等を通して、生徒が再び地域とのつながりをとり戻していく予定である。	B
中期取組目標振り返り	・新しい学校教育目標の下、学校経営中期取組目標において、9つの重点取組分野の目標の実現に向けて、全職員で取り組んできた。担当部署が明確になってきて、職員の参画意識の向上につながっている。 ・生徒の地域活動への積極的な参加については、学校と地域が連携して取り組んでいく必要があると考える。「まち」とともに歩む学校懇談会を中心としながら、取り組んでいきたい。 ・新教育課程の検討を通じて、個々の教育活動の意義や方法について検討してきた。より充実した教育への取組を続けていきたい。	○新学習指導要領における育むべき資質・能力を明確にした。今後は教職員の学力観、指導観の転換を図る必要がある。 ○次年度の新学習指導要領の完全実施に向けて、教育課程委員会を中心として、評価の在り方、評価方法、資料を含めた評価計画の作成を行うとともに、生徒への周知も行ったが、次年度以降も丁寧な説明が必要がある。 ○今年度はコロナ禍により地域との連携が不十分であったため、次年度以降、感染症の状況による部分は多いが地域の教育力を活かしながら教育活動が展開できるよう努める。 ○計画的な教育相談の実施を通して、家庭との密な連携を図ることを心がけてきた。次年度は今年度実施できなかった家庭訪問を加え、生徒の生活環境などより細かく保護者との連携に努める。	B